札幌大学総合論叢　第 33 号（2012 年 3 月）

〈論文〉

「古代日本」の留学者たち②
―『書紀』に見る留学者 ―

泉　　敬　史

1

『書紀』が留学の足跡を載せている留学者は五十六人，唐への留学者が四十四人と最多で，続いて新羅が八人，百済が三人，高句麗は一人となっている。入出国両方の時期が明記されている例は十二人とむしろ少なく，その内善信等三人の百済へ渡った「学問尼」の二年という留学期間を例外として，他の九人のいずれも入唐留学者の留学期間は十五年から三十七年と長期にわたっている。「学生」は十人と少なく，その分僧籍が多い。

名前，身分と留学先，出帰国年と滞在期間を以下に一覧で示す。

1	善尼・（恵善・禅蔵）	学問尼	百済	588	590	02
4	南淵請安	学問僧	唐	608	640	32
5	倭漢福因	学　生	唐	608	623	15
6	旻（日文）	学問僧	唐	608	632	24
7	高向玄理	学　生	唐	608	640	32
8	奈羅恵明	学　生	唐	608	―	―
9	慧　　隠	学問僧	唐	608	639	31
１０	新漢人大圀	学　生	唐	608	―	―
１１	新漢人広斉	学問僧	唐	608	―	―
１２	恵　　斉	学問僧	唐	―	623	―
１３	恵　　光	学問僧	唐	―	623	―
１４	薬師恵日	学問僧	唐	―	623	―
１５	霊　　雲	学問僧	唐	―	632	―

１６	勝鳥養	—	唐	—	632	—
	（会　丞　『法苑珠林』・『集神州三宝感通録』　のことか？）					
１７	恵　　雲	学問僧	唐	—	639	—
１８	鞍作得志		高句麗	客死		
１９	道　　厳	学問僧	唐	653	—	—
２０	道　　通	学問僧	唐	653	—	—
２１	道　　光	学問僧	唐	653	678	25
２２	恵　　施	学問僧	唐	653	—	—
２３	覚　　勝	学問僧	唐	653	客死	
２４	弁　　正	学問僧	唐	653	—	—
２５	恵　　照	学問僧	唐	653	—	—
２６	僧　　忍	学問僧	唐	653	—	—
２７	知　　聰	学問僧	唐	653	難船	
２８	道　　昭	学問僧	唐	653	—	—
２９	定　　恵	学問僧	唐	653	665	12
３０	安　　達	学問僧	唐	653	—	—
３１	道　　観	学問僧	唐	653	—	—
３２	知　　弁	学問僧	唐	653	—	—
３３	義　　徳	学問僧	唐	653	690	37
３４	道　　福	学問僧	唐	653	難船・入唐できず	
３５	義　　向	学問僧	唐	653	難船・入唐できず	
３６	恵　　妙	学門僧	唐		客死	
３７	智　　国	学問僧	唐		難船	
３８	智　　宗	学問僧	唐	—	690	—
３９	義　　通	学問僧	唐		難船	
４０	巨勢薬	学　生	唐	653	—	—
４１	氷老人	学　生	唐	653	668	15
４２	坂合部石積	学　生	唐	653	—	—
４３	高黄金	学　生	唐	—	668	—
４４	妙　　位	学問僧	唐	—	668	—
４５	法　　勝	学問僧	唐	—	668	—
４６	土師甥	学　生	唐	—	684	—

４７	白猪宝然	学　生	唐	—	684	—
４８	雲　　観	学問僧	新羅？	—	685	—
４９	観　　常	学問僧	新羅？	—	685	—
５０	智　　隆	学問僧	新羅？	—	687	—
５１	観　　智	学問僧	新羅？	—	689	—
５２	明　　聰	学問僧	新羅？	—	689	—
５３	浄　　願	学問僧	唐	—	690	—
５４	山田史御方	「為沙門学問」	新羅	—	—	—
５５	神　　叡	学問僧	新羅？	693	—	—
５６	弁　　通	学問僧	新羅？	693	—	—

ここに名が挙がった留学者たちは『書紀』の時代の留学者たちであり，古代日本が派遣した初期の留学者たちであり，その呼ばれ方から「学問＝留学＝学問」という見られ方がおそらく伏存していただろう時期の留学者たちである。「留学」ということばはまだ一般的には使われておらず，学問的研鑽や才覚や成果の相当部分が，学識経験者あるいは学究者としての僧侶たちに求められており，仏教領域に限らない多分野の文物の将来が委ねられていた。留学者の八割方を僧籍が占めていることもその現れといえよう。上記した一覧から，まだ触れていない留学者について以下に補記する①。

2

白雉四年（653）五月に発遣された遣唐使使節団には多くの留学者が名を残している②。学問僧として１９番の道厳から３５番の義向までの十七人と，学生として４０番の巨勢薬から４２番坂合部石積までの三人がそれで，この使節は二船建てで第一船は百二十一人，第二船には百二十人が乗船したとされており，合計二百四十一名中少なくても二十人が留学者だったことが分かる。

二十名の内第二船に乗ったとされているのは学問僧道福（３４番）と義向（３５番）の二人だけで，残りは第一船に乗っている。七月にこの第二船が「薩摩之曲。竹嶋之間」で水難し，ただ五人を残して沈死したとの記載が見え③，この二人は入唐できなかったこと

がわかる。

翌年の白雉五年（654）二月に二年連続で遣唐使使節が発遣される。かつての留学者高向玄理を大使より格上の押使とし，やはり学問僧として入唐経験のある薬師恵日を副使にした二船建てで，新羅経由で無事入京し天子に謁見している。『書紀』は使節団が東宮監門郭丈擧に日本の地理や国初の神についてつぶさに訊かれ答えたことと玄理が客死したことを伝えている。また，伊吉博得の言として，学問僧恵妙（３６番）・覚勝（２３番）の客死，知聡（２７番）・智国（３７番）・義通（３９番）の水死，智宗（３８番）と定恵（２９番），妙位（４４番）・法勝（４５番）・学生氷連老人（４１番）・高黄金（４３番）等と，別倭種というから混血の韓智興・趙元宝等のそれぞれの帰国について伝えている④。

土師甥（４６番）と白猪宝然（４７番）は天武十三年（684）十二月に帰朝の記載が見える。「百済役」とあるから白村江での戦役の際捕虜になった二人の人物とともに新羅経由で帰国している⑤。

学問観常（４９番）と雲観（５１番）は天武十四年（685）五月に新羅から帰国の記述があり，ここには加えて新羅王から献じられた献物が列記されている⑥。

同じく学問僧智隆（５０番）は持統元年九月に帰朝し⑦，持統三年（689）４月には観智（５１番），明聡（５２番）の帰朝も記されている⑧。持統四年（690）９月には智宗，義徳，浄願（５３番）が新羅船で帰朝している⑨。

この時期に帰朝した留学者は新羅によって送り届けられる例が多い。これは当時の新羅との外交情勢の一面を示すものであろう。持統六年（692）十月に授位の記事が見える山田史御形（５４番）は，かつて僧侶として新羅に留学したことが顕彰されるように付記されており⑩，同七年には遣新羅使を務めた息長真人老と大伴宿禰子と合わせて学問僧弁通（５６番）と神叡（５５番）にも絁綿布が下賜される等⑪，新羅への留学に一定の重みが置かれていた気配も感じられる。ただし，必ずしも留学先を新羅と断言させない筆遣いがあることを後で触れる。

3

さて，ここで『書紀』に見える留学者関連の記事をもう少し細かく見ていきたい。

巻第二十一，崇峻天皇即位前紀六月二十一日条に，記録上では「古代日本」初の留学者となる善信尼等の記述が現れる。彼らは時の大臣蘇我馬子に出家の途は戒律をもって本となすと言い，受戒法を学びに百済へ向かうことを願い出る⑫。それを受けて馬子は折から

来朝した百済からの調使にとりなしを頼むが，いったん帰国して国王の意向を確認してからでも遅くはないでしょうといなされてしまう。百済と言えば「古代日本」への仏教公伝を実現した相手国であり，このように外交カードを切りながらこの時期の主たる対外門戸としての役割を演じていたのであろう。翌年の崇峻元年に百済は遣使に加えて僧恵総・令斤・恵寔の三人をもって仏舎利を献じ，善信尼等の留学を受け入れている⑬。『書紀』は何も記しはしないが，外交上の何らかの経緯がこの譲歩を引き出したものと考えられよう。

推古年間に入ると聖徳太子が現れ，高句麗僧慧慈・博士覚哿，百済僧慧聰等多くのインテリが来帰し，仏典や外典を積極的に求め始める。一方で新羅との関係は任那地域をめぐる外交上の紛糾がくすぶり続け，八年（600）には新羅征討も行われた。『隋書・倭国伝』はこの年の倭王の朝貢を伝えているが，三国が鼎立した三世紀前半以来，久々の統一王朝隋の成立⑭がこの時期の国際情勢を大きく塗り替えていく。隋は高句麗を攻め，新羅は任那地域を攻め，百済は新羅の勢力拡大を危惧し，「古代日本」は隋への遣使を開始する。こういった政治情勢に左右されて外交は活発化し，それが文物受容の筋道や機会を増やす結果ともなっていく。小野妹子の入隋は推古十五年（607）のことであるが，彼は翌十六年四月に隋使裴世清と共に帰朝し，同年九月にはその帰国を送る形で再度遣使され，それに四人の「学問僧」と四人の「学生」が同行している⑮。また，『隋書・倭国伝』は妹子の最初の来朝の際に僧数十人が仏法を学びに来たことを記しており⑯，この時機に俄かに「古代日本」の留学者たちの息吹が立ち上り始めるのも，まさにこういった東アジア国際情勢がもたらしたひとつの必然と言うべきであろう。

「古代日本」の留学者たちは，隋という統一国家の誕生で活動の場を大きく広げることになった。猫の目のように変わる外交模様に反映されるまま，半島から大陸に舞台を移したのではなく，中国王朝というはるかに大きな舞台を活動範囲に加えたということである。推古三十一年（623）七月に仏像一具と金塔，舎利を帯同して新羅使が来朝するが，これに連れられて，妹子と共に隋に留学した倭漢直福因が十五年ぶりの帰国を果たしている⑰。他国の使節に送られて帰朝する事例を『書紀』は伝えているが，これは何ら特殊なことではない。外交使節団の一員として同時期に渡海する往路とは違い⑱，それぞれの事情で異なる往路において，船の便を新羅等他国に頼る例は数多い。他国の使節船に自在に乗船できるはずはなく，国家外交の旗の下で派遣された留学者たちには，それぞれの留学生活や往還において，時として国の枠も越える措置が講じられ，便宜が図られていたのだろう。これらが国際的な人的交流の端緒となり，それがだんだんと進歩発展していくことで，単なる知識の導入に留まらない，留学の新たな価値や意味の創生という必然につながる流れのひとつとなっていく。

4

白雉四年（653）と五年（654）に二年連続で発遣された遣唐使使節団についての記載には，二十七人の留学者の消息が列記されており，個々は上表にまとめた通りである。四年の使節団には学問僧十七人と学生三人の名が記されており，五年については高向玄理を押使とする発遣の記事の後に，「伊吉博徳言」として学問僧六人と学生一人の，入唐時期が不確かな新たな名前とその消息が付記されている⑲。博徳自身は斉明五年（659）に発遣された直後の遣唐使節で入唐しており，もっとも新鮮な現地の情報をもたらしたものと考えられる⑳。留学者の動静を追って『書紀』を読む身にはたいへんにありがたい記事なのであるが，残念ながらこの後このようなまとまった記述は姿を潜めてしまう。『書紀』の記述がすべてを網羅するはずもない以上，この使節団にばかり留学者が偏ったと考えるのが不当なことは言うまでもなく，であるならば，なぜここには記載されたのかと考えると，そもそもなぜ二年連続で遣唐使が発遣される必要があったのかを考える鍵にもなり得よう。

まず考えるべきなのは当時の政治情勢である。白雉は大化に続く孝徳期に位置し，大化元年六月十二日には中大兄と鎌足主導による入鹿誅殺という大きな政局が起きている。『書紀』はこれら二人の主導者の結託を，かつて三十二年の長きを隋唐に留学した南淵請安と関連付けている㉑。また，直後の十四日には，政治的混乱の収拾と，新たな政治制度・秩序の構築を急ぐ中で，請安と同時期に留学した沙門旻法師と高向史玄理を国博士に任命し，その才を頼んでいる㉒。八月八日には大寺に使いして僧尼を教導する十師を任命するが，そこには唐からの帰化僧福亮と入唐留学者であった恵雲・霊雲・僧旻の三人が名を連ねている㉓。さらに大化五年（649）には玄理と僧旻に詔して八省・百官を置かせる等㉔，この時期の朝廷が，留学者が学び身につけた知見を法政両面で必要とした事実をあらためて知ることができる。翌年二月に今の山口県にあたる穴戸国から白い雉が献上される。僧旻らの上奏もあってこの瑞兆をもって大化から白雉へと改元され，白雉年間の遣唐使はこのような情勢の中で発遣されることになる。今日では「改新」と呼ばれるこの時期の政治的混迷が何を求めたのか。求める以前に，そもそも「南淵先生」が説いた「周孔之教」が理想とする政治体質の実現を誓ってそれは断行されたとも思えるのだが，留学者たちに関する『書紀』の記述を追うことでその糸口が見つけられる。新たな政治体制を構築・強化していく上で留学の成果が強く求められた。遣唐使使節が連年で発遣されたのは，留学者たちの積極的な往還が切実に期待されたからであり，そのことが『書紀』の記載にも反映されたと捉えられる。

5

『書紀』は巻末に近い天武・持統期に，新羅からの留学者の帰朝を多く伝えている。すでに述べたとおり，十四年（685）に学問僧観常・雲観が遣新羅使の帰朝に従って帰国したのに続き⑥，二年後の持統元年には学問僧智隆が⑦，さらにその二年後の同三年には明聰・観智等が，いずれも新羅使に連れられて帰国している⑧。また，同七年には遣新羅使への下賜に併記する形で学問僧弁通・神叡等の名も見られる⑪。おそらく同じ帰国船で帰朝を果たしたのだろう。彼らは全員が僧籍で，学問僧と記されている。ただし，新羅から帰ってきたからといって新羅への留学であったと断定できるわけではない。入唐留学者が新羅経由で祖国の土を踏む例は数多く見られるのである。一方，同じく新羅使に従って同時期に帰朝した智宗，義徳，浄願等⑨が「大唐学問僧」と記されているのに対して，この七人等は単に「学問僧」とあるのみで，留学先については触れられていない。新羅から帰朝し，しかも「大唐」とされていないためか，遣新羅留学者であろうと見立てられることが多いようだが，ここでは留学先が不確かである点に注目したい。『書紀』に見える留学者の事例は一覧で示したが，そこに現れる朝鮮半島への留学者の数は，隋唐に比べて極端に少ない。ただしこの一覧は，留学者の名前が記されている記事のみの抜粋であり，名前は書き残されなかったものの，半島への他の留学者があったことを『書紀』は記載している。たとえば鞍作得志（１８番）の留学先での奇妙な逸話を報告しているのは「同学」の高麗学問僧たちであるし㉕，大化四年（648）には三韓への学問僧発遣の記事が見える㉖。そもそも遣隋使が発遣されるまでの期間，朝鮮半島は渡来人たちの通り道であり，「古代日本」の主たる文物受容の筋道であり，僧侶や博士といった知識人たちを派遣してよこす窓口だった。中国王朝から直接にではなく，半島の国々を伝ってそれらは至ったのである。そんな三韓に，自ずと留学者たちも派遣されたことを『書紀』は記してはいるが，回数も人名も少なく規模も不詳で，これは，より近く往還が容易で，その分早い時期から行き来が盛んだった三韓への留学が実際に少なかったと捉えるよりも，むしろ少なくしか『書紀』が記述しなかったと捉えるべきであろう。どうやら三韓への留学は，隋唐への留学とは違った見られ方を帯びていたようである。

『書紀』の時代の留学は専ら「学問」であり，留学者は「学問僧」あるいは「学生」と記されていることは別稿で述べた㉗。しかしその後留学には別の用語も使われ始める。「留学生」という呼称が初めて見えるのは『続日本紀』天平七年の記述で㉘，『続紀』にはそれ以外の新たな呼称も見える㉙。また，これは一例だが，推古朝に高麗（高句麗）に留学したと『日本霊異記』に載る行善について，『続紀』は「留学」とせずに「遊学」という

用語を当ててもいる[30]。つまり，「古代日本」の留学者たちは，本稿で述べた『書紀』の時代以降，いくつかの新たな色分けをされていくのである。

注記

注① 『古代日本の留学者たち①－「学生」「学問僧」－』（札幌大学総合論叢第３２号所収）で鞍作得志までは触れている。

注② （白雉四年五月）夏五月辛亥朔壬戌。発遣大唐大使小山上吉士長丹。副使小乙上吉士駒。〈駒。更名糸。〉学問僧道厳。道通。道光。恵施。覚勝。弁正。恵照。僧忍。知聡。道昭。定恵。〈定恵。内大臣之長子也。〉安達。〈安達。中臣渠毎連之子。〉道観,〈道観。春日粟田臣百済之子。〉・学生巨勢臣薬。〈薬豊足臣之子。〉・氷連老人,〈老人。真玉之子。或本。以学問僧知弁。義徳。学生坂合部連磐積而増焉。〉并一百二十一人。俱乗一船。以室原首御田為送使。又大使大山下高田首根麻呂。〈更名。八掬脛。〉・副使小乙上掃守連小麻呂。学問僧道福。義向。并一百二十人。俱乗一船。以土師連八手為送使。

注③ （白雉四年）秋七月。被遣大唐使人高田根麻呂等。於薩麻之曲。竹嶋之間合船没死。唯有五人。繋胸一板,流遇竹嶋。不知所計。五人之中。門部金採竹為筏。泊于神嶋。凡此五人経六日六夜。而全不食飯。於是。褒美金，進位給禄。

注④ （白雉五年）二月。遣大唐押使大錦上高向史玄理。〈或本云。夏五月。遣大唐押使大華下高向玄理。〉大使小錦下河辺臣麻呂。副使大山下薬師恵日。判官大乙上書直麻呂。宮首阿弥陀。〈或本云。判官小山下書直麻呂。〉小乙上岡君宜。置始連大伯。小乙下中臣間人連老。〈老。此云於喩。〉・田辺史鳥等。分乗二船。留連数月。取新羅道泊于莱州。遂到于京奉覲天子。於是東宮監門郭丈挙，悉問日本国之地里及国初之神名。皆随問而答。押使高向玄理卒於大唐。〈伊吉博得言。学問僧恵妙於唐死。知聡於海死。智国於海死。智宗以庚寅年付新羅船帰。覚勝於唐死。義通於海死。定恵以乙丑年付劉徳高等船帰。妙位。法謄。学生氷連老人。高黄金。并十二人。別倭種韓智興。趙元宝。今年共使人帰。

注⑤ （天武天皇十三年十二月）癸未。大唐学生土師宿禰甥。白猪史宝然。及百済役時没大唐者猪使連子首。筑紫三宅連得許。伝新羅至。則新羅遣大奈末金物儒。送甥等於筑紫。

注⑥ （天武天皇十四年五月）辛未。高向朝臣麻呂。都努朝臣牛飼等。至自新羅。乃学問僧観常。雲観。従至之。新羅王献物。馬二疋。犬三頭。鸚鵡二隻。鵲二隻。及種々宝物。

注⑦ （持統元年九月）甲申。新羅遣王子金霜林。級飡金薩挙。及級飡金仁述。大舎蘇陽信等奏請國政。且獻調賦。学問僧智隆附而至焉。筑紫大宰便告天皇崩於霜林等。即日。霜林等皆著喪服東向三拝。三発哭焉。

注⑧ （持統三年四月）壬寅。新羅遣級飡金道那等奉弔瀛真人天皇喪。并上送学問僧明聡。観智等。別献金銅阿弥陀像。金銅観世音菩薩像。大勢至菩薩像。各一躯。綵帛。錦綾。

注⑨ （持統四年九月）丁酉。大唐学問僧智宗。義徳。浄願。軍丁筑紫国上陽咩郡大伴部博麻。従新羅送使大奈末金高訓等。還至筑紫。

注⑩ （持統六年）冬十月壬戌朔壬申。授山田史御形務広肆。前為沙門学問新羅。

注⑪ （持統七年三月）乙巳。賜擬遣新羅使直広肆息長真人老。勤大弐大伴宿禰子君等。及学問僧弁通。神叡等絁綿布。各有差。又賜新羅王賻物。

注⑫ （崇峻即位前紀六月）甲子。善信阿尼等謂大臣曰。出家之途以戒為本。願向百済，学受戒法。是月。百済調使来朝。大臣謂使人曰。率此尼等。将渡汝国，令学戒法。了時発遣。使人答曰。臣等帰蕃先道国王。而後発遣。亦不遅也。

注⑬ （崇峻元年）是歳。百済国遣使并僧恵総。令斤。恵寔等。献仏舎利。百済国遣恩率首信。徳率益文。那率福富味身等,進調。并献仏舎利。僧聆照律師。令威。恵衆。恵宿。道厳。令開等。寺工太良未太。文賈古子。鑪盤博士将徳白昧淳。瓦博士麻奈文奴。陽貴文・陵貴文。昔麻帝弥。画工白加。蘇我馬子宿禰請百済僧等。問受戒之法。以善信尼等，付百済国使恩率首信等。発遣学問。

注⑭ 隋は開皇九年（589）に陳を滅ぼして統一国家を樹立した。

注⑮ （推古天皇元年）夏四月庚午朔己卯。立厩戸豊聡耳皇子為皇太子。仍録揖政。以万機悉委焉。橘豊日天皇第二子也。母皇后曰穴穂部間人皇女。皇后懐妊開胎之日。巡行禁中。監察諸司。至于馬官。

乃当廐戸。而不労忽産之。生而能言。有聖智。及壮，一聞十人訴。以勿失能弁。兼知未然。且習内教於高麗僧恵慈。学外典於博士覚哿。並悉達矣。父天皇愛之，令居宮南上殿。故称其名，謂上宮廐戸豊聡耳太子。

（推古天皇三年）是歳。百済僧慧聡来之。此両僧弘演仏教。並為三宝之棟梁。

（推古天皇十六年）辛巳。唐客裴世清罷帰。則復以小野妹子臣為大使。吉士雄成為小使。福利為逸事。副于唐客而遣之。爰天皇聘唐帝。其辞曰。東天皇敬白西皇帝。使人鴻臚寺掌客裴世清等至。久憶方解。季秋薄冷。尊何如。想清悉。此即如常。今遣大礼蘇因高。大礼乎那利等往。謹白，不具。是時。遣於唐国学生，倭漢直福因。奈羅訳語恵明。高向漢人玄理。新漢人大国。学問僧，新漢人日文。南淵漢人請安。志賀漢人恵隠。新漢人広斉等，并八人也。

注⑯　『隋書・倭国伝』大業三年（607）「聞海西菩薩天子重興仏法故遣朝拜兼沙門数十人來学仏法」

注⑰　（推古天皇三一年）秋七月。新羅遣大使奈末智洗爾。任那遣達率奈末智。並来朝。仍貢仏像一具。及金塔并舎利。且大灌頂幡一具。小幡十二条。即仏像居於葛野秦寺。以余舎利。金塔。灌頂幡等，皆納于四天王寺。是時。大唐学問者僧恵斉。恵光。及医恵日。福因等，並従智洗爾等来之。於是。恵日等共奏聞曰。留于唐国学者。皆学以成業。応喚。且其大唐国者法式備定之珍国也。常須達。

注⑱　斉明三年に沙門智達を新羅に送らせて入唐を図った例がある。この時は断られ帰国するも，翌四年に新羅船で智通と共に入唐している。

注⑲　恵妙・智国・智宗・義通・妙位・法勝の六人の学問僧と学生高黄金。その他の名前は白雉四年の入唐者と重複している。

注⑳　『書紀』が遣使の記事にこれほど多くの留学者名を付記した例は他にない。これは後の『続紀』や，それ以降のいわゆる『六国史』を見渡しても同様である。遣使に関する記事や任命された大使・副使等の名を漏らすことはないが，同行した留学者名まで記した例は推古十六年の八名の留学者とこの例に代表され，つまり，単なる留学派遣が記事とされたのはこの時点までということになる。

注㉑　（皇極天皇三年正月乙亥朔）自学周孔之教於南淵先生所。

注㉒　（孝徳天皇即位前紀六月庚戌）以沙門旻法師。高向史玄理為国博士。

注㉓　（大化元年八月癸卯）癸卯。遣使於大寺，喚聚僧尼而詔曰。於磯城嶋宮御宇天皇十三年中。百済明王奉伝仏法於我大倭。是時。群臣俱不欲伝。而蘇我稲目宿禰独信其法。天皇乃詔稲目宿禰，使奉其法。於訳語田宮御宇天皇之世。蘇我馬子宿禰追遵考父之風。猶重能仁世之教。而余臣不信。此典幾亡。天皇詔馬子宿禰，而使奉其法。於小墾田宮御宇天皇之世。馬子宿禰奉為天皇，造丈六繡像。丈六銅像。顕揚仏教恭敬僧尼。朕更復思崇正教，光啓大猷。故以沙門狛大法師・福亮。恵雲。常安。霊雲。恵至。寺主僧旻。道登。恵隣・恵妙。而為十師。別以恵妙法師為百済寺々主。此十師等宜能教導衆僧。

注㉔　（大化五年二月）是月。詔博士高向玄理与釈僧旻。置八省・百官。

注㉕　（皇極天皇四年四月）夏四月戊戌朔。高麗学問僧等言。同学鞍作得志。以虎為友。学取其術。或使枯山変為青山。或使黄地変為白水。種々奇術不可殫究。又虎授其針曰。慎矣慎矣。勿令人知。以此治之，病無不愈。果如所言。治無不差。得志恒以其針隠置柱中。於後虎折其柱，取針走去。高麗国知得志欲帰之意。与毒殺之。

注㉖　（大化四年二月）二月壬子朔。於三韓遣学問僧。

注㉗　前掲『古代日本の留学者たち①－「学生」「学問僧」－』（札幌大学総合論叢第３２号所収）

注㉘　（天平七年四月）辛亥。入唐留学生従八位下下道朝臣真備，献唐礼一百卅巻。太衍暦経一巻，太衍暦立成十二巻。測影鉄尺一枚。銅律管一部。鉄如方響写律管声十二条。楽書要録十巻。絃纏漆角弓一張。馬上飲水漆角弓一張。露面漆四節角弓一張。射甲箭廿隻。平射箭十隻。

注㉙　拙稿「遣唐使時代の留学の呼び分けについて」『アジア遊学 No27（特集）遣唐使をめぐる人と文学』勉誠出版所収

注㉚　（養老五年六月）戊戌。詔曰。沙門行善。負笈遊学。既経七歳。備嘗難行。解三五術。方帰本郷。矜賞良深。如有修行天下諸寺。恭敬供養。一同僧綱之例。又百済沙門道蔵。寔惟法門袖領。釈道棟梁。

年逾八十。気力衰耄。非有束帛之施。豈称養老之情哉。宜仰所司四時施物。絁五疋。綿十屯。布廿端。又老師所生同籍親族。給復終僧身焉。